



敏感期について

幼児期の子どもには、ある特定のことに對して、強い感受性を持ち、敏感になって簡単に吸収してしまう時期があり、それを「敏感期」といいます。

この「敏感期」に入ると、子どもは環境から必要なものを吸収し、自分を創っていきます。人間には、さまざまな物事に対して敏感期が訪れますが、そのほとんどが0～6歳の幼児期に集中しているのです。

敏感期は以下のように分けられます。

言語に対する敏感期

赤ちゃんはお母さんの胎内にいるころから声を聞いていて、すでに言語の敏感期は始まっています。2歳前後～5歳頃までが話し言葉の敏感期で周囲の言語を難なく習得します。

秩序に対する敏感期

秩序の敏感期は、1歳半～2歳半くらいに強く表れます。物が置いてある場所や順番、物事のやり方など、些細なことにもこだわりを持ちます。いつも同じであることが、子どもの安心感につながります。



※子どもの不機嫌になる理由を知らなければ、親は困惑するばかりですが、それが「秩序感」という時期特有の感受性に起因しているのだと知れば、子どもの反応をもっとよく見て、ふさわしい対応の仕方考えることができます。

感覚に対する敏感期（3歳～6歳）

「目（視覚）、耳（聴覚）、皮膚（触覚）、鼻（嗅覚）、舌（味覚）」という五感を刺激するものに対して強い興味を持ち、感受性が豊かになります。これらは人間が外の世界と関係をもつのに大切な窓口で、この窓口が完成し洗練されるのが、「感覚の敏感期」と言われる時期です。

※「感覚の敏感期」は一生に一回きりの感覚を磨いていく時期です。

優れた感性をもった人に成長するためには、まず外界から感じ取る感覚をこの敏感期に磨いておかなければなりません。

そのために、子どもが感動したり、喜んだりすることが大事です。



運動の敏感期

運動の敏感期には何でも自分でやりたがります。3歳までは歩く、座る、持つなどの大きな動き、3歳～6歳はそれらの動きをさらに調整、洗練させ、指先などの細かい動きもコントロールできるようになります。

数の敏感期

数に対しての敏感期は3歳半～5歳。年齢や日付、物の数など生活の中で数に興味を示します

文化の敏感期

文化の敏感期は6歳くらいから始まり、動植物や宇宙、世界のことなどすべてのことを知りたがります。